美術の窓(31)

東京国立博物館「室町時代の屏風絵展」を見学して

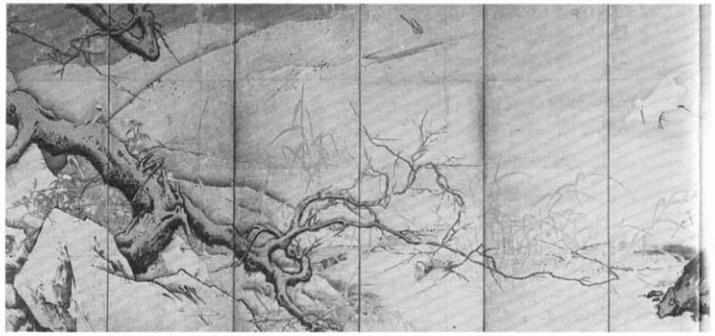
大和文華館館長 吉川逸治

古典的な美術誌『国華』が創刊されてから一千号に達したと驚嘆したのが、もう十何年か過去の事柄となって、今春はその創立刊行百年を迎えるというのを記念した行事として、東京国立博物館本館の大会場に新しく戦後、注目を惹くようになった室町時代の屏風絵を多数陳列して、日本美術史の一生面を呈示しています。私どもが、昭和の初頃、室町時代の美術として主として親しんできたところは、前代の禅宗美術と、それを支持する地味で質素な武家文化で、極端に云えばまだ活気ある文化の創造を思わせる美術は、いわば冬眠状態だったという感がありました。そのなかで雪舟がひとり孤峰のごとく聳えたつ状態に思えました。優美で色彩豊かな王朝時代の美術は、墨一色の禅画と墨跡の影にかくれて、もう二度と多彩な山水花木の自然の懐に人物たちの活発な動態は見られなくなるのではなかろうかと。

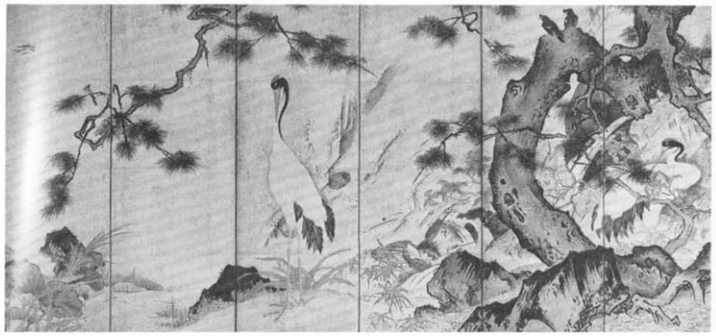
ところが、今度の展観で驚いたのは、意外にも冒頭から、「日月屏風」「浜松屏風」などという極彩色に金銀泥箔を惜まぬ重苦しい程派手な色彩世界で、一度に古い土佐派が醒めて来た様子。それも、昔の伝統ある格式を踏んでいるのもあれば、新たに古くさい伝承は脱ぎすてて、大胆に蛮風と思うほど型や彩色を重ねて表現を強調する。宮廷や寺社の絵所から解放された絵描きも居れば、伝統のままに王朝の夢を繰返しているものもいます。画題も多様で、伝承された名所絵、歌絵ばかりではなく、新らしい武家町人農民の生活の断面も絵筆にのぼる。下克上の時代は、宮廷寺社の儀礼が解体しながら、新興階級の生活儀礼の形成のために再使用される。武家の頭領である将軍も、慎しい書院造りの邸宅に住んで、床間のしつらい、棚の飾りに供来の名物を陳べ、政治の余暇に宴楽を楽しむ。彼等の生活儀礼がおのずから必要に応じて生れてくる。芸能人が現れて、宴席を取りもつ。伝統の文化は、ふたたび新しい形式を重ねて、能・連歌の集いや、闘茶・香合せなどの遊楽の集いに、これら屏風、襖は恰好の空間を作る。画題も、そこで行なわれる宴楽に合う様に選ばれる。仏間なら墨が選ばれよう。それも墨色の濃い、重い、強いもの。遊楽の集いに伝承の学芸の一端を隠ばせることは、画に伝承の添物を挿入させる。しかし、乱世のこととて、皆が識っている言葉と形姿の強調や繰返しになる。型にはまるかというと、案外そうではない。現実主義の時代がものの定着を許さない。同じ様で、いくつもの変種、変化を作らせる。

さて、この多彩な屏風絵、襖絵の世界でも、一段ととびぬけて雪舟の花鳥屏風が全体を睥睨している。画格の秀抜なることは、乱世の絵画に進むべき方向を示している。元信は、これを悟って、狩野派を大成して、次の時代の画壇を支配する。室町時代は、幸運にも次の時代に承け継げられるべき絵画のために好条件を準備してくれた。絵画自体の間でも、下克上の選択が行なわれた。それは、大画面の展開する空間を用意してくれたのである。絵画は、大画面に描かれて始めてその優劣が明白となる。大画面制作によって、絵画の造形上の諸問題がはっきりと把握することができ、構図から人物、山水花鳥のデッサンの的確さ、形象のヴォリュームの充実、その空間における位置の正誤、彩色の濃淡・明暗度の適切さなどを学びうる。雪舟は在明三年の勉強の結実である日本禅人等揚の銘のある四大幅で、当時の明浙派の写景の筆法をわがものにして、帰国以来、本邦の実景を写して、誤またず、時に装飾屏風に樹草岩石水辺鳥類を描けば、遠近の空間を満す光の明暗度から、物体の量感の充実は勿論、諸物の質を伝えて、微に入り細に渉る。墨線の動勢、抑揚は形を作るのみならず、色彩と和して墨・色二つながら豊かにする。むべなる哉、雪舟の作と伝うる花、鳥山水屏風の三作が存すること。雪舟は自作を完璧にまで仕上げる余裕をもった時代に生きたことは幸だった。狩野は、偉大な先輩たちを学び、注間の殺到する時世に先立って、一門の画術を準備して置くことができた。

四季花鳥図(左隻) 伝雪舟筆



同 (右隻)



季刊 美のたより No.87
平成元年5月19日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.